

日本における成人の Adulthood 認知に関する探索的検討 —地域活動への参加経験に着目して—

高橋 尚也 (立正大学心理学部)

An exploratory study on adulthood cognition of Japanese adults:
Focusing on the experience of participating in community activities

Naoya TAKAHASHI (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Abstract

Adulthood is defined as “when adults think that they are better than young people and can control them, it is when they don’t listen to youth and their ideas”. Adulthood is a concept proposed in the field of adolescence psychology to discuss the abuse of power that adults have over children. The purpose of this study was to explore how Japanese adults fall into the group of interdependent construal evaluate scenarios involving adulthood that have been discussed in the Western countries. A quarter-sampling was conducted from a research panel of 30-69 years old owned by the research company, and a total of 400 people (50 people in each age) were sampled, including 200 people involved in community activities and 200 people not involved in local activities. A WEB survey was conducted for these survey subjects. The correlation coefficients between the evaluation for three scenarios including adulthood and the local activity variables were calculated. As a result, positive correlations were obtained between five elements of evaluation and community activities (e. g. the number of community groups, interest in local administration, political satisfaction, political efficacy, community attachment, and community connection). From these results, it was interpreted that people who were more active in community activities showed positive evaluations even in scenarios involving adulthood.

Key words : adulthood, community participation, empowerment, citizen participation

問題

本論文では、地域活動参加に関する研究文脈に、“Adulthood” 概念を適用し検討を行う意義を明確にするため、成人の Adulthood 認知について探索的な検討を行い、地域活動経験の有無との関連を分析する。

(1) Adulthood とは何か

Adulthood とは「大人が『若者よりも優れており、若者をコントロールできる』と考えること」と定義される。Adulthood は、大人が子どもに与える力の乱用を論じる概念として青年心理領域で提唱された概念である (Flasher, 1978)。Adulthood は、その後公衆衛生学領域における介入プログラムの中で概念が拡張され、多用されている。例えば、Checkoway (1996) による若者のコミュニティ変革プログラムでは、変革の障害として Adulthood が取り上げられ、Adulthood のない味方となる大人を探す課題が採用されている。

また、ミシガン大学で開発された Youth Empowerment Solutions では、Adulthood が含まれたシナリオを用いた役割演技が行われている。このプログラムが立脚している概念がエンパワメント (empowerment) である。エンパワメントは、「個人や集団が自らの生活への統制感を獲得し、組織的・社会構造的に影響を与えられるようになること」と定義され多層性を有している。Zimmerman (1995) は、エンパワメントを測定可能な形で「心理的エンパワメント」として定式化している。心理的エンパワメントの特徴は、単に個人内の要素に加え、行動的要素と相互作用的要素を含んでいる点である。個人内の要素には自尊感情やリーダーシップへの効力感が、行動的要素にはリーダーシップ行動や地域や組織への関与が、相互作用的要素には、他者をメンターとすることや他者を資源として動員することがそれぞれ含まれている。前述の Youth Empowerment Solutions は、この Zimmerman (1995) の心理的エンパワメント理論に即した、アフタースクールプロ

グラムである。YES は、6つのユニットから構成され、各回80分、19回のセッションからなるプログラムである。プログラムの概要は Table 1 のとおりである。このうち Adulthood は、Unit 4 で扱われており、大人集団に提案したり、関わったりする前の段階の内容となっている。

このように若者に対するエンパワメント・プログラムにおいては、Adulthood が多様な他者と協力して社会変革を行う上での重要概念として注目されている。しかし、PsychInfo において、“adulthood” をキーワードとして検索を行うと30件がヒットするものの、実証研究はわずか7件にとどまっている(2022年10月時点)。それらの実証研究の内容をみると、若者の社会変革や若者参加型行動研究の文脈における研究(Conner, 2016; Perry-Hazan, 2016; Pech, Valencia, & Romero, 2019; Kennedy, Anyon, Engle, & Schofield, 2022)、トランスジェンダー者の市民参加(Singh, 2013; Singh, Meng, & Hansen, 2014)や女性のアルコール摂取(Yang, & Tang, 2018)との関連による検討がそれぞれなされていた。このように、Adulthood そのものについては、若者の市民参加の文脈で検討が行われているが、十分な研究蓄積があるとは言いがたい。

(2) Adulthood を地域活動研究に適用する意義

ここからは、地域活動参加に関する研究文脈に、

“Adulthood” 概念を適用し検討を行う有用性について論じていく。内閣府(2007)による国民生活白書によると、地域活動参加者は約10%、自治会や町内会への参加率は年々減少し50%と、日本における市民参加の低さが報告されている。また、地域住民組織に関する研究では、参加者の固定化・高齢化や活動のワンパターン化(平川, 2005)が指摘されている。このように、地域コミュニティでの活動には、参加率の低さ、参加者の固定化、活動のワンパターン化などによる活動継続への困難さに関する課題が表面化している。

日本における市民参加や地域活動組織に関する研究を概観すると、環境ボランティア団体への参加継続・積極的参加意図の規定要因として、組織への帰属意識の高さと友人からの影響が示されている(安藤・広瀬, 1999)。また、防犯活動への参加では、地域への愛着や社会的活動性の高さがリーダーの参加動機にあることが推定され、地域内の所属組織数の多さや政治的関心の高さ、活動から受ける受益性の高さが一般住民の参加を促進することが解明されている(高橋, 2010)。このように、従来の日本の知見では、欧米と異なり、ボランティアな市民参加が、類似性や同質性が高いメンバーで構成された活動、つまり、結束型社会関係資本(Putnam, 2000)を有しているほど継続されやすく、活動から受ける受益性の高さや地域内所属組織数の多い者の参加が高いことが報告されている。

Table 1 Youth Empowerment Solutions のプログラム内容 (各プログラムの表題をもとに著者が作表)

Unit 1	1	導入・お互いを知る	Welcome/Getting to Know You
	2	文化的遺産とマスク	Cultural Heritage and Masks
	3	チームビルディングとグループの約束	Team Building/Group Agreements
	4	リーダーになることとは	What does it Mean to be a Leader
	5	YES の目標に向けて	Working Toward YES Goals
Unit 2	6	メディアステレオタイプ	Media Stereotypes
	7	フォトボイスの紹介	Introduction to Photovoice
	8	コミュニティツアー・フォトボイスの写真撮影	Community Tour/Photovoice Picture Taking
	9	コミュニティにある資産を訪ねる	Community Asset Visit
Unit 3	10	フォトボイスの振り返り	Photovoice Reflections
	11	コミュニティプロジェクトのブレインストーミング	Community Project Brainstorm
	12	アイデアを査定しプロジェクトを選択すること	Assessing Ideas and Choosing Projects
Unit 4	13	チームビルディングと計画委員会	Teambuilding and Planning Committees
	14	Adulthood と大人と共に作業すること	Adulthood and Working with Adults
Unit 5	15	世代を超えたチームでの共同作業	Working Together in Intergenerational Teams
	16	プロジェクト提案を完成させること	Finishing Project Proposals
Unit 6	17	コミュニティリーダーとの会議	Community Leader Meeting
	18	プロジェクト評価と祝賀会(中間)	Mid Project Evaluation and Celebration
	19	プロジェクト評価と祝賀会(終了)	End of Project Evaluation and Celebration

一方で、カリスマ的住民リーダーを中心とした属人の運営により代替わりが困難、行政の下請け的で慣例的な市民参加（高橋，2007）、活動内容が一般の住民に理解されない（平川，2005）、生来の住民と新たに住み着いた住民との対立など、結束型社会関係資本の特徴である同質性の高さによる課題や問題も指摘されている。

以上より、相互協調性が強い日本（高田，1999）と指摘されるにおいて、市民参加を促進する上で結束型社会関係資本が有効という知見と、結束型社会関係資本の高さによる問題があるという見解が存在し、結束型社会関係資本が市民参加に与える効果が十分に説明されていない。この知見の混乱の背景に成人の Adulthood があると仮定し、Adulthood を克服できているか否かに焦点化することで、結束型社会関係資本が市民参加に与える影響を明らかにすることが期待できる。また、Adulthood の克服に焦点化することで、地域活動への参加や継続を改善するためのより具体的な改善策を提供することが期待される。

（3）本研究の目的

これまで Adulthood に関する研究は、欧米におけるコミュニティ心理学領域において、若者のエンパワメント向上プログラムの中で取り上げられ、若者の市民参加研究として行われてきた。これまで日本において Adulthood はほとんど注目されていないものの、相互協調性が強いと指摘される日本において、Adulthood の克服に焦点化することで、結束型社会関係資本が地域活動にポジティブな効果を与えるか、ネガティブな効果を与えるかに関する知見が双方存在することの整理が可能になることが示唆された。そこで、本研究では、地域活動参加に関する研究文脈に、“Adulthood”概念を適用し検討を行う意義を明確にするため、成人の Adulthood 認知について探索的な検討を行い、地域活動経験の有無との関連を分析する。具体的には、成人を対象に Adulthood を含むシナリオと含まないシナリオを提示し、Adulthood の認知について探索的に検討する。その上で、地域活動経験の有無別で Adulthood 認知の移動や Adulthood 認知と関連する変数を探索する。

方法

（1）調査方法

調査会社が保有する30～69歳のリサーチパネルより、地域活動経験の有無でスクリーニングを行った上で、クォータ・サンプリングを行った。地域活動関与者200名および地域活動不関与者200名の計400名（各年代50名ずつ）を調査対象者とし、クローズ型のWEB調査を実施した。調査時期は2018年11月であった。

（2）分析項目

①シナリオとその評価：Youth Empowerment Solutions のプログラムにおいて、Adulthood についてディスカッションする際に用いられた Adulthood を含むシナリオ3つと Adulthood を含まないシナリオ2つを翻訳の上、提示した（シナリオ内容は Appendix に示す）。

それぞれのシナリオについて、適切性（若者への反応として適切である）、尊重度（若者のことを尊重している）、期待度（若者の行動や能力に対して期待を持っている）、受容度（若者のことを受け入れている）、対等共有度（若者と対等に場を共有している）について評価を求め、それぞれ6件法（「1.まったくそう思わない」～「6.非常にそう思う」）で評定を求めた。

②地域や行政に関する項目：行政関心、行政満足度、行政効力感、地域愛着、近所づきあいについてそれぞれ1項目でたずねた。

③地域活動変数：地域内所属組織数（「その他」を含む12の活動カテゴリを提示し、多重回答形式で回答を求めたもののチェック数を指標とした）、地域活動に対する参加頻度（「1年に1回以下」「1年に数回程度」「1ヶ月に1回程度」「1ヶ月に数回程度」「1週間に1回程度」「ほぼ毎日」の6段階で評定を求めた）、活動継続年数（「1年未満」「1年～3年未満」「3年～5年未満」「5年～10年未満」「10年以上」の5段階で評定を求めた）、活動継続意図（「続けたくない」「あまり続けたくない」「どちらともいえない」「まあ続けたい」「非常に続けたい」の5段階で評定を求めた）をたずねた。なお、これらの地域活動変数は、スクリーニング時にたずねた。

④性別・年齢。

結果

(1) 提示されたシナリオに対する評価

Fig. 1 に提示されたシナリオに対する評価の平均値を示す。その結果、Adultism を含まない 2 つのシナリオでは 5 つの評価指標がすべて 3.5 の理論的中間点を上回っており、Adultism を含む 3 つのシナリオでは、5 つの評価指標がシナリオ 5 の期待度を除いて理論的中間点を下回っていた。このことから、Adultism を含まないシナリオはいずれも好ましい方向に、Adultism を含むシナリオはおおむね好ましくない方向に評価されていたといえる。

そこで、Adultism を含む 3 シナリオと含まない 2 シナリオの評価を、それぞれ評価側面ごとに加算し、シナリオ数で平均化して指標とした。

(2) 地域活動経験の有無別にみたシナリオに対する評価

地域活動経験の有無別に Adultism を含むシナリオとそうでないシナリオに対する評価を検討するために、地域活動経験の有無を参加者間要因、Adultism を含むシナリオか否かを参加者内要因とする 2 要因混合計画分散分析を行った (Table 2)。その結果、いずれの評価側面についても、地域活動経験有無と Adultism を含むか否かの主効果は有意であったが、両者の交互作用は有意でなかった。

多重比較の結果、Adultism を含むシナリオの方が含まないシナリオよりいずれの側面も低く評価されていた。地域活動経験を有する者の方がそうでないものより、いずれの側面も高く評価していた。

(3) Adultism 認知と関連する変数

Adultism を含むシナリオおよび含まないシナリオの各評価側面指標と、地域や行政に関する項目との相関係数を算出した (Table 3)。

Fig.1 提示したシナリオに対する評価

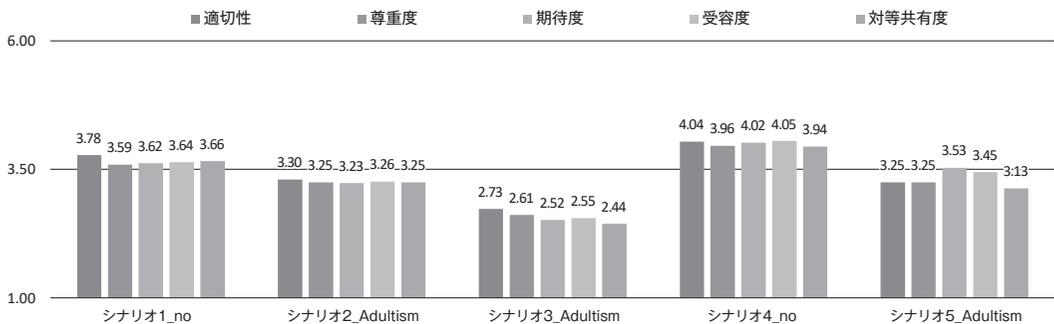


Table 2 地域活動経験の有無と Adultism の有無別にみたシナリオに対する評価

		Adultism シナリオ		非 Adultism シナリオ		主効果		交互作用
		M	(SD)	M	(SD)	地域活動経験	Adultism	
適切性	地域活動経験無	3.01	(0.79)	3.82	(0.96)	$F(1,398) = 6.00$	$F(1,398) = 224.29$	$F(1,398) = 0.005$
	地域活動経験有	3.18	(0.82)	4.00	(0.98)	$p < .05, \eta_p^2 = .02$	$p < .001, \eta_p^2 = .36$	n.s., $\eta_p^2 = .00$
尊重度	地域活動経験無	2.92	(0.81)	3.67	(0.96)	$F(1,398) = 8.85$	$F(1,398) = 187.56$	$F(1,398) = 0.03$
	地域活動経験有	3.15	(0.84)	3.88	(0.99)	$p < .01, \eta_p^2 = .02$	$p < .001, \eta_p^2 = .32$	n.s., $\eta_p^2 = .00$
期待度	地域活動経験無	2.98	(0.76)	3.70	(0.96)	$F(1,398) = 10.61$	$F(1,398) = 208.81$	$F(1,398) = 0.007$
	地域活動経験有	3.21	(0.82)	3.94	(0.96)	$p < .01, \eta_p^2 = .03$	$p < .001, \eta_p^2 = .34$	n.s., $\eta_p^2 = .00$
受容度	地域活動経験無	2.97	(0.80)	3.73	(0.97)	$F(1,398) = 10.25$	$F(1,398) = 231.24$	$F(1,398) = 0.04$
	地域活動経験有	3.21	(0.83)	3.96	(0.94)	$p < .01, \eta_p^2 = .03$	$p < .001, \eta_p^2 = .37$	n.s., $\eta_p^2 = .00$
対等共有度	地域活動経験無	2.83	(0.88)	3.69	(0.98)	$F(1,398) = 8.68$	$F(1,398) = 257.10$	$F(1,398) = 0.000$
	地域活動経験有	3.05	(0.86)	3.91	(0.98)	$p < .01, \eta_p^2 = .02$	$p < .001, \eta_p^2 = .39$	n.s., $\eta_p^2 = .00$

Table 3 Adulthood 認知と地域や行政に関する項目との関連 (N=400)

	行政関心	行政満足度	行政効力感	地域愛着	近所づきあい	年齢
Adulthood 適切性	.19 **	.18 **	.23 **	.24 **	.19 **	-.05
Adulthood 尊重度	.21 **	.23 **	.26 **	.24 **	.23 **	.01
Adulthood 期待度	.24 **	.23 **	.24 **	.26 **	.25 **	.00
Adulthood 受容度	.25 **	.24 **	.24 **	.24 **	.24 **	-.02
Adulthood 対等共有度	.18 **	.18 **	.21 **	.22 **	.22 **	.05
非 Adulthood 適切性	.20 **	.24 **	.17 **	.23 **	.17 **	.04
非 Adulthood 尊重度	.21 **	.26 **	.18 **	.17 **	.21 **	.01
非 Adulthood 期待度	.26 **	.25 **	.19 **	.19 **	.21 **	.03
非 Adulthood 受容度	.21 **	.23 **	.19 **	.15 **	.19 **	.00
非 Adulthood 対等共有度	.20 **	.24 **	.19 **	.17 **	.24 **	.01

注：** $p<.01$, * $p<.05$

その結果、行政関心・行政満足度・行政効力感・地域愛着・近所づきあいと5つの評価側面との間すべてに正の有意な相関が得られた。なお、年齢と Adulthood 認知との間に有意な関連は認められなかった。この結果は、地域や行政に関する項目の得点が高いと、Adulthood を含むシナリオであってもそうでないシナリオであっても、評価がポジティブになりがちであることを意味している。

次に、地域活動経験を有する者について、Adulthood を含むシナリオおよび含まないシナリオの各評価側面指標と、地域活動経験に関する項目との相関係数を算出した (Table 4)。その結果、地域内所属数の多さと Adulthood シナリオへのすべての評価側面との間に、正の有意な相関がみられた。活動参加頻度の多さと Adulthood シナリオの尊重度と期待度、活動継続意図と Adulthood シナリオの期待度、受容度、対等共有度との間にそれぞれ正の有意な相関が認められた。活動参加

頻度と Adulthood を含まないシナリオへの適切性との間に、活動継続意図と Adulthood を含まないシナリオへの対等共有度との間に、それぞれ正の有意な相関が認められた。

考察

本研究では、地域活動参加に関する研究文脈に、“Adulthood” 概念を適用し検討を行う意義を明確にするため、成人の Adulthood 認知について探索的な検討を行い、地域活動経験の有無との関連を分析した。

(1) Adulthood 認知

各シナリオについて、適切性、尊重度、期待度、受容度、対等共有度の評価を求めた結果、Adulthood を含まないシナリオはいずれも好ましい方向に認知され、Adulthood を含むシナリオはおおむね好ましくない方向に認知されていた。このことから、日本においても

Table 4 地域活動経験者における Adulthood 認知と地域活動経験との関連 (N=200)

	地域内所属 組織数	活動参加 頻度	活動継続 年数	活動継続 意図
Adulthood 適切性	.31 **	.06	-.05	.13
Adulthood 尊重度	.22 **	.16 *	-.04	.13
Adulthood 期待度	.27 **	.14 *	-.06	.18 *
Adulthood 受容度	.27 **	.09	-.03	.20 **
Adulthood 対等共有度	.18 *	.13	-.02	.23 **
非 Adulthood 適切性	.08	.16 *	.10	.13
非 Adulthood 尊重度	.06	.09	.11	.06
非 Adulthood 期待度	.06	.10	.06	.09
非 Adulthood 受容度	.12	.13	.04	.11
非 Adulthood 対等共有度	.10	.12	.06	.14 *

注：** $p<.01$, * $p<.05$

Adulthood は否定的に捉えられていることがうかがえる。ただし、Adulthood を含むシナリオ 5 (中学生のわりに賢いわ) では、期待度が理論的中間点を上回っており、日本の成人においては否定的でなく捉えられがちであることが示唆された。また、Adulthood を含むシナリオ 5 に加え、シナリオ 2 (若者の提案を大人が受け入れず別な提案をする) も、シナリオ 3 (大人が若者たちのからかいを注意しない) よりも理論的中間点に近い評価がなされていた。このことから、シナリオ 5 やシナリオ 2 は、儒教的影響の強い日本においては、否定的な評価が現れにくい特徴を有していると解釈される。このような特徴はあるものの、Adulthood を含むシナリオと含まないシナリオに統合し、評価側面ごとの特徴をみると、Adulthood の有無による評価には得点差があったことから、指標として用いることへの有用性が確認された。

地域活動経験別に Adulthood 認知の特徴を分析した結果、Adulthood を含むシナリオでも含まないシナリオでも、地域活動経験を有する者の方がそうでないものより、いずれの側面も高く評価していることが明らかとなった。この結果には 2 つの解釈可能性があると考えられる。第一の解釈は、地域での活動場面のシナリオであったために、地域活動経験を有さない者にとってイメージしにくかったのに対し、地域活動経験を有する者にとっては、イメージしやすかったために評価に違いがみられたという解釈である。第二の解釈は、地域活動経験者が Adulthood に対する感受性が低いという解釈である。この第二の解釈については、要因間の交互作用効果が有意でなかったことから強くは主張できないものの、日本の地域活動においてみられる結束型社会関係資本の特徴である同質性の高さによる問題を考慮すれば成立する余地がある。

(2) Adulthood 認知と関連する変数

Adulthood を含むシナリオに対する評価であっても、Adulthood を含まないシナリオに対する評価であっても、行政関心、行政満足度、行政効力感、地域愛着、近所づきあいの間に正の関連があることが明らかとなった。この結果は、地域や行政への関心の高さがどちらのシナリオであっても高い評価を示すということである。この結果は、シナリオが地域での活動場面のものであったために、地域活動経験を有さない者にとってイメージしにくかったと考えられる。

地域活動関与経験者において、地域内活動参加数と Adulthood を含むシナリオに対する評価との間にすべて正の関連がみられたり、活動参加頻度や活動継続意図と Adulthood を含むシナリオへのいくつかの評価との間に正の関連がみられたりした。他方、地域活動参加

指標と Adulthood を含まないシナリオに対する評価との間の関連はわずかであった。この結果は、地域活動経験を有していることが、Adulthood シナリオに対する感受性を鈍らせる可能性があることを示唆している。このことは、現在の日本における地域活動が特定の大人中心で、若者が参加する余地が少なかったり、若者に対する期待が低かったりする課題と対応している。また、日本の地域活動における結束的社会関係資本の強さによる問題との対応している現象と考えられる。

(3) 今後の課題

本研究では、Youth Empowerment Solutions で用いられたシナリオを用いて、探索的に Adulthood 認知を検討した。今後の第一の課題は、日本の文化や地域活動の現状に合わせた Adulthood シナリオを再検討したり、Adulthood を検出する指標を作成したりすることである。

また、本研究では、調査会社モニターを調査対象者としたため、地域活動経験の回答に対する信頼性が低いという制約があるものの、地域活動関与と Adulthood シナリオへのポジティブ評価との間に関連がみられた。第二の課題は、Adulthood に対する反応が鈍い層の特徴を詳細に検討することと、地域活動経験への関与のどのような点が Adulthood への反応を鈍らせるのかを検討する必要がある。

引用文献

- 安藤香織・広瀬幸雄 (1999). 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因 社会心理学研究, 15, 90-99.
- Checkoway (1996). *Young people creating community change*. W.K. Kellogg Foundation.
- Conner, J.O. (2016). Pawns or power players: The grounds on which adults dismiss or defend youth organizers in the USA. *Journal of Youth Studies*, 19, 403-420.
- Flasher, J. (1978). Adulthood. *Adolescence*, 13(51), 517-523.
- 平川全機 (2005). 継続的な市民参加における公共性の担保——ホロヒラみどり会議・ホロヒラみどりづくりの会の 6 年—— 環境社会学研究, 11, 160-173.
- Kennedy, H., Anyon, Y., Engle, C., & Schofield, C. L. (2022). Using intergroup contact theory to understand the practices of youth-serving professionals in the context of YPAR: Identifying racialized adulthood. *Child & Youth Services*, 43, 76-103.
- 内閣府 (2007). 国民生活白書 (平成19年度版) 国立印刷局

- Pech, A.S., Valencia, B.G., & Romero, A. J. (2019). Reflections from novice youth participatory action researchers: Emphasis on critical gender perspectives. *Journal of Community Psychology, 48*, 302-322.
- Perry-Hazan, L. (2016). Children's participation in national policymaking: 'you're so adorable, adorable, adorable! I'm speechless; so much fun!'. *Children and Youth Services Review, 67*, 105-113.
- Putnam, R.D. (2000). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Democracy*. New York: Simon & Schuster.
- Singh, A.A. (2013). Transgender youth of color and resilience: Negotiating oppression and finding support. *Sex Roles: A Journal of Research, 68*, 690-702.
- Singh, A. A., Meng, S. E., & Hansen, A.W. (2014). 'I am my own gender': Resilience strategies of trans youth. *Journal of Counseling & Development, 92*, 208-218.
- 高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程——比較文化的・横断的資料による実証的検討——教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高橋尚也 (2007). 住民との「協働」に関わる自治体職員の意識に関する探索的検討 産業・組織心理学研究, 20(2), 53-64.
- 高橋尚也 (2010). 地域防犯活動に対する市民参加を規定する要因：東京都江戸川区における二つの調査結果をもとに 社会心理学研究, 26, 97-108.
- Yang, Y. & Tang, L. (2018). Understanding women's stories about drinking: Implications for health interventions. *Health Education Research, 33*, 271-279.
- Zimmerman, M., Stewart, S., Morrel-Samuels, S., Hutchinsson, P., Reischl, T., & Roberts, E. (2017). *Youth Empowerment Solutions Curriculum Multi-cultural Version (Second Edition)*. School of Public Health Prevention Research Center University of Michigan & Michigan Youth Violence Prevention Center.
- Zimmerman, M. A. (2000). Empowerment theory: Psychological, organizational, and community levels of analysis. In J. Rappaport & E. Seidman (Eds.), *Handbook of Community Psychology* (pp. 43-63). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

註

1) 本研究の実施にあたっては、立正大学心理学研究所2018年度研究助成と、JSSP 科研費 (15K17256) を受けた。また、本論文の作成にあたる資料収集にあたっては、JSSP 科研費 (19K03199) を受けて行われた。本研究の一部は、日本心理学会第83回大会 (2019)、および、8th International Conference of Community Psychology (2020) において発表された。

Appendix 本研究で用いたシナリオ

シナリオ番号	Adulthood	内 容
1	含まない	一人の若い参加者が、あるプロジェクトについてのアイデアを提案したところ、もう一人の若い参加者がそのアイデアをからかい、それは「愚策だ」と言いました。すると、成人の A さんが中に入り「私たちのグループの約束のひとつはお互いを尊重することであつたはずだ。私たちが他の人のアイデアをからかった時、私たちはその規範に従っていない。」と言いました。
2	含む	若者の一人が、中学校における放課後活動の資金を増やすために地域の政治家と一緒に作業することを含むプロジェクトを提案した。すると、成人の A さんが「うーん、私はそのアイデアが面白いと思うが、それは私たちにとって過度の作業になるようように思える。かわりに、一緒にコミュニティガーデンを作る作業をしよう。」と言いました。
3	含む	数名の若者が靴を理由に他の若者をからかっている様子を目撃した後、成人の A さんが、肩をすくめて「子どもたちは子どもたちだ」と言いました。そして成人の A さんは、からかいを止めることをしませんでした。
4	含まない	若者たちのグループが地元の新聞社とテレビ局に自分たちのプロジェクトについて話すことで、そのプロジェクトのことを記事にしてもらいたいと思っていました。グループの中の成人の A さんは、プレスリリースを書いた経験がありました。その A さんは、プレスリリースのサンプルを持っていくことと、若者にプレスリリースの書き方を教えることを申し出ました。それから、A さんは若者たちがプロジェクトについてプレスリリースを書くことを助けることにしました。
5	含む	会議でブレインストーミングをするプロジェクトの間、ある成人の A さんが「それは素晴らしいアイデアだ。あなたは中学生のわりに本当に賢いわ」と言いました。

要 約

Adultism は「大人が若者の意見を聞くことなしに、『若者よりも優れており、若者をコントロールできる』と考えること」と定義される。Adultism は、大人が子どもに与える力の乱用を論じる概念として青年心理領域で提唱された概念である。本研究では、欧米で議論されている Adultism について、相互協調的と分類される日本の成人がどのように評価しているかを探索的に分析することを目的とした。調査会社が保有する30～69歳のリサーチパネルより、地域活動経験の有無でスクリーニングを行った上で、クォータ・サンプリングを行った。地域活動関与者200名および地域活動不関与者200名の計400名（各年代50名ずつ）を調査対象者とし、クローズ型の WEB 調査を実施した。Adultism を含む3シナリオに対する評価と地域活動変数との相関係数を算出した。その結果、地域内所属組織数・行政関心・行政満足度・行政効力感・地域愛着・近所づきあいと5つの評価側面との間すべてに正の有意な相関が得られた。この結果から、地域活動変数が高いと、Adultism を含むシナリオであってもポジティブな評価を示していることを解釈された。

キーワード：adultism、地域参加、エンパワメント、市民参加